

第4章 人権に関わる意識と実態

今回の調査において、男女間の人権に関わる問題として質問したのは、暴力被害経験、セクシュアル・ハラスメントの目撃や相談経験、配偶者・恋人間暴力(DVを含む)に関する相談先、性行動と性をめぐる施策に関する意識の4点である。これは、過去数回の調査と比べても、充実した内容といえる。

暴力被害経験では、以前から継続的に取り上げているDVの問題に加え、ストーキング、セクシュアル・ハラスメント、痴漢行為など、特に女性にとって生活を脅かす重大な問題になりうるものについて、被害経験を聞いた。また、セクシュアル・ハラスメントについては、被害よりさらに身近であると考えられる目撃や相談の経験についても聞いた。また、DVに関する相談先について、以前の調査と同様に聞いた。

性行動と性をめぐる施策についての意識に関する質問は、以前の調査を継承し、全く同じ文言で質問をした性行動についての意識に関する質問と、今回新しく質問項目を設定した性をめぐる施策についての意識に関する質問にわかれる。前者は過去の結果との比較が可能であるし、後者は新しい知見が得られることが期待された。

1 親密な関係内での支配・暴力の被害経験

親密な関係の中での暴力は、社会の中で否認され続けてきた。発生していないことにされたり、あったと認められても、程度が軽いとされたり、原因は被害者にあるとされたりしてきた。つまり、さまざまな形で、問題を取り上げることに抵抗する力が働いてきたし、今でも働いている。

しかし、この問題を直視し、解決を模索する動きもまた、徐々に広がってきている。たとえば配偶者・恋人間暴力(DVを含む)を例にとろう。アメリカでは、1970年代のシェルター(緊急避難施設)の設立や、今や古典となった『バタード・ウーマン』の刊行(1979年)などから運動が広がっていったといわれる。日本でも、1990年代中頃に「夫(恋人)からの暴力に関する研究会」の調査結果が、そして平成10(1998)年に東京都調査の結果が公表された。特に、このテーマに関する日本初の一般人口調査である東京都調査のインパクトは大きく、名古屋市の平成12(2000)年の調査を含め、他の自治体でも同様の調査の実施、あるいは、ジェネラルサーベイの中にDVに関する質問項目の追加などがおこなわれた。これはおそらく、平成13(2001)年のDV防止法の制定にも、何らかの影響を与えたと思われる。

問 26 あなたは、次のような経験をしたことがありますか。

上記のような経緯を受け、この名古屋市男女平等参画基礎調査では、男女間の人権に関する問題として、毎回DV(配偶者・恋人間暴力)の問題を取りあげている。そして今回の調査では、質問項目を増やし、DV等以外にも、ストーキング、セクシュアル・ハラスメント、痴漢行為など、特に女性にとって生活を脅かす重大な問題になりうるものについて、被害経験を聞いた。

その結果、全体での被害率は、図2-62のようになった。また、男女別に集計したものを加えると、表2-12のような結果が得られた。

図2-62 暴力被害経験率

n=1,181

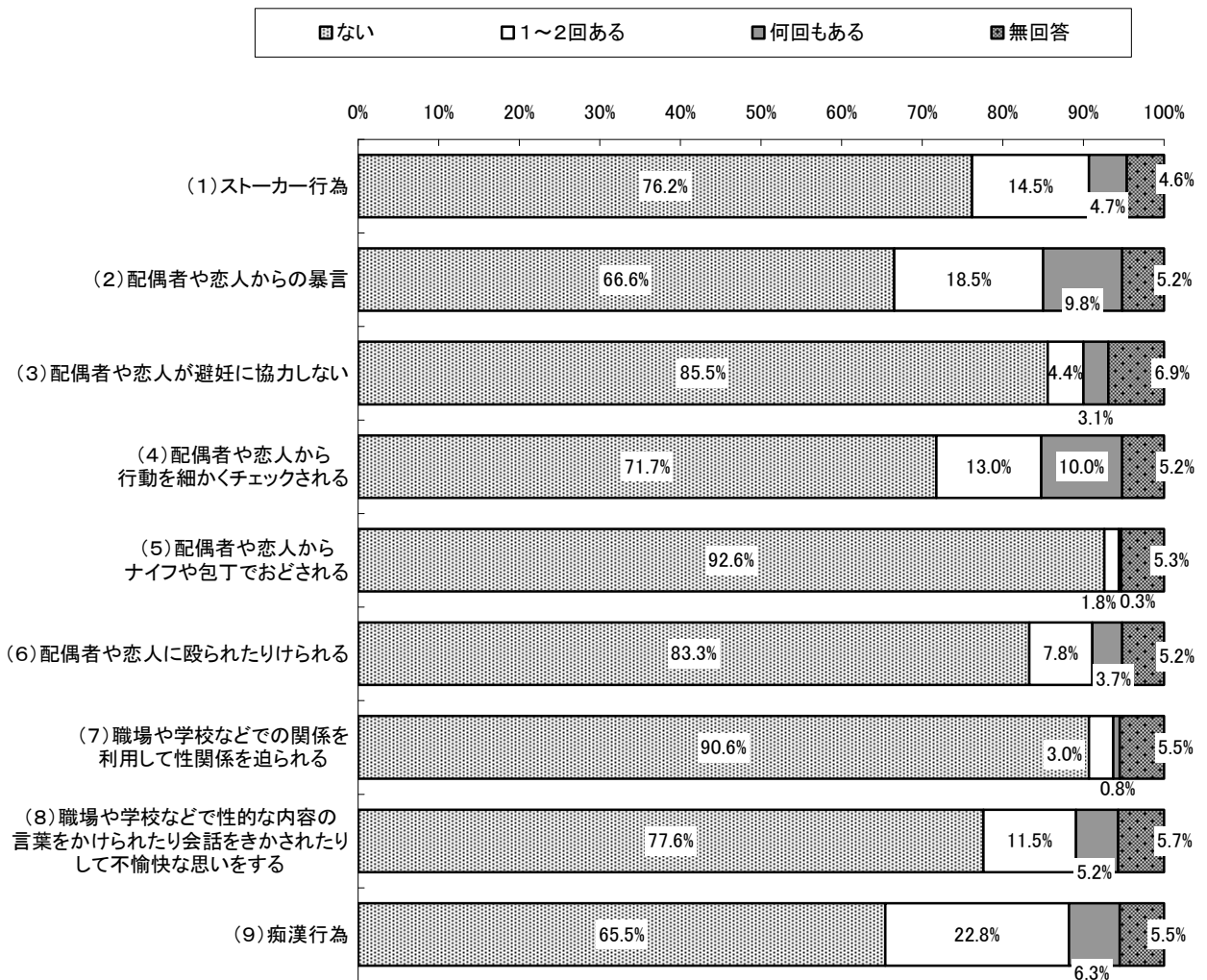


表2-12 暴力被害経験率(男女別)

	全体 (n=1,181)	女性 (n=723)	男性 (n=458)
ストーカー行為	19.2%	21.3%	15.9%
配偶者や恋人からの暴言	28.3%	32.6%	21.4%
配偶者や恋人が避妊に協力しない	7.5%	10.5%	2.8%
配偶者や恋人から、行動を細かくチェックされる	23.0%	23.7%	22.1%
配偶者や恋人から、ナイフや包丁でおどされる	2.0%	1.5%	2.8%
配偶者や恋人に殴られたり、けられる	11.5%	14.0%	7.6%
職場や学校などでの関係を利用して性関係を迫られる	3.9%	5.9%	0.7%
職場や学校などで性的な内容の言葉をかけられたり、性的な内容の会話を聞かされたりして不愉快な思いをする	16.7%	22.4%	7.6%
痴漢行為	29.0%	45.5%	3.1%

この結果をまとめてみよう。

まず、全体での被害率を見ると、「1～2回あった」あるいは「何回もあった」という回答をあわせた比率が比較的高かったのは5項目で、「痴漢行為」(29.0%)、「配偶者や恋人からの暴言」(28.3%)、「配偶者や恋人から、行動を細かくチェックされる」(23.0%)、「ストーカー行為」(19.2%)、「職場や学校などで性的な内容の言葉をかけられたり、性的な内容の会話を聞かされたりして不愉快な思いをする」(16.7%)であった(カッコ内は回答比率)。すなわち、痴漢、DVの精神的暴力、ストーキング、環境型のセクシュアル・ハラスメントが、被害の多い分野だったといえる。

それに対し、回答率が低かったのは2項目で、「配偶者や恋人から、ナイフや包丁でおどされる」(2.0%)、「職場や学校などでの関係を利用して性関係を迫られる」(3.9%)であった(カッコ内は回答比率)。

次に男女差を見てみよう。やはり、男性に比べて女性の方の被害経験率がおしなべて高い。特に、「痴漢行為」では40ポイント以上、「職場や学校などで性的な内容の言葉をかけられたり、性的な内容の会話を聞かされたりして不愉快な思いをする」や「配偶者や恋人からの暴言」「配偶者や恋人から、行動を細かくチェックされる」では10ポイント以上の差があった。

そのほかに目を引くこととして、「ナイフや包丁で脅される」への回答について、男性の方が女性より高い比率を示したことがあげられる。前回調査では、今回の質問の第1～6項目と同じ質問をしたが、どの項目も男性より女性の方の被害率が高かったのが、今回はそれとは異なる結果が出たように見える。だが今回は、そもそも「被害を受けた」という回答率が低く、カイ二乗検定でも有意差は出なかった。またこの「ナイフや包丁で脅される」への回答は、他のDV被害(第2、3、4、6項目)への回答と逆の傾向を示している。これらのことを考え合わせると、今回の回答が、男性の暴力被害の増加を示すもの

か、それとも一部男性の被害感の強さを示すものか、などについて、にわかには判断しがたい。

一方、ストーカー行為では、被害経験率総体としては女性の方が男性より高いが、「何回もある」という回答では男性の方の経験率が高いという結果が出た(女性4.4%、男性5.2%)。ここで示された被害率はあまり高いものではないが、カイ二乗検定では男女間で有意な差が出た。この原因については、他分野でも示される男性の被害意識の高さのため、という解釈もありうるが、男女を問わないストーカー行為の本質と考え合わせ、さらに検討していく必要があると思われる。

問26のうち項目(2)～(6)は、配偶者または恋人からの暴力についてたずねている。名古屋市の特徴の把握のため、全国調査データ(内閣府男女共同参画局「男女間の暴力に関する調査」)と比較してみよう。次頁の表2-13、2-14をご覧ください。

表2-13 配偶者または恋人からの暴力の被害経験率比較(女性)

		ない	1～2回 ある	何回も ある	無回答	「ある」 の計
身体的 暴力	(5) 配偶者や恋人から、ナイフや包丁でおどされる	94.1%	1.2%	0.3%	4.4%	1.5%
	(6) 配偶者や恋人に殴られたり、けられる	81.9%	9.8%	4.1%	4.1%	14.0%
精神的 暴力	(2) 配偶者や恋人からの暴言	63.1%	21.4%	11.2%	4.3%	32.6%
	(4) 配偶者や恋人から、行動を細かくチェックされる	72.1%	13.7%	10.0%	4.3%	23.7%
性的 暴力	(3) 配偶者や恋人が避妊に協力しない	84.0%	5.9%	4.6%	5.5%	10.5%
内閣府 調査	身体に対する暴行を受けた	72.9%	19.0%	5.9%	2.2%	24.9%
	精神的な嫌がらせや恐怖を感じるような脅迫を受けた	80.1%	10.6%	6.0%	3.2%	16.6%
	性的な行為を強要された	81.2%	11.1%	4.7%	2.9%	15.8%

注：内閣府調査は平成20(2008)年10～11月実施で、結婚経験のある人に「配偶者からの暴力」について聞いたもの。全体の有効回答数3129(回収率62.6%)で、この質問については、n=1358(女性)。

表2-14 配偶者または恋人からの暴力の被害経験率比較(男性)

		ない	1～2回 ある	何回も ある	無回答	「ある」 の計
身体的 暴力	(5) 配偶者や恋人から、ナイフや包丁でおどされる	90.4%	2.6%	0.2%	6.8%	2.8%
	(6) 配偶者や恋人に殴られたり、けられる	85.6%	4.6%	3.1%	6.8%	7.6%
精神的 暴力	(2) 配偶者や恋人からの暴言	72.1%	13.8%	7.6%	6.6%	21.4%
	(4) 配偶者や恋人から、行動を細かくチェックされる	71.2%	12.0%	10.0%	6.8%	22.1%
性的 暴力	(3) 配偶者や恋人が避妊に協力しない	88.0%	2.0%	0.9%	9.2%	2.8%
内閣府 調査	身体に対する暴行を受けた	83.7%	11.8%	1.9%	2.7%	13.6%
	精神的な嫌がらせや恐怖を感じるような脅迫を受けた	88.6%	7.3%	1.5%	2.6%	8.8%
	性的な行為を強要された	92.7%	3.9%	0.4%	3.1%	4.3%

注：内閣府調査は平成20(2008)年10～11月実施で、結婚経験のある人に「配偶者からの暴力」について聞いたもの。全体の有効回答数3129(回収率62.6%)で、この質問については、n=1077(男性)。

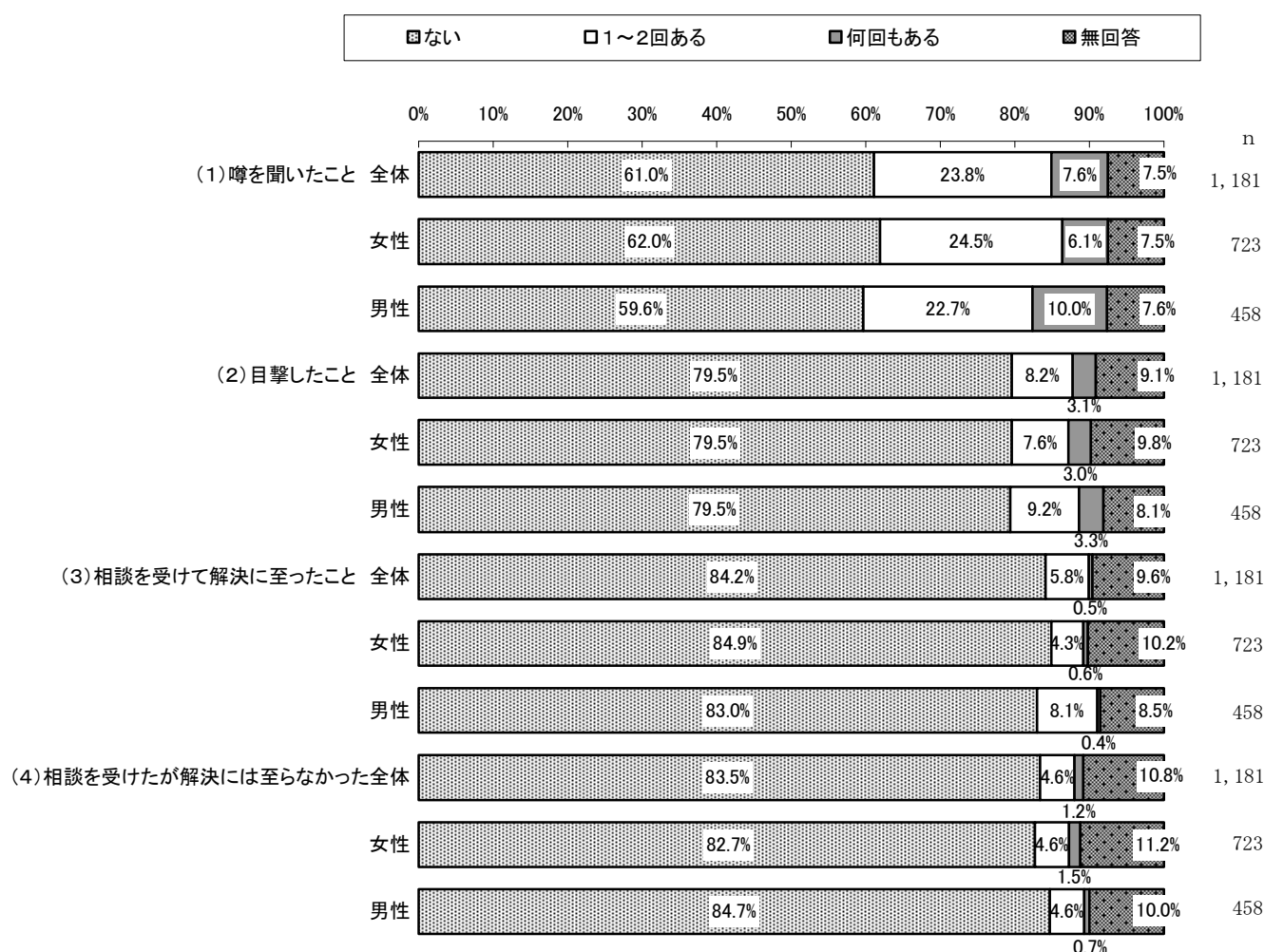
これを見ても、身体的暴力と性的暴力については、男女とも内閣府の全国調査の方が高い経験率を示しているが、精神的暴力については名古屋市の方が高い経験率を示している。質問に用いられている文言が異なることと、内閣府は「配偶者からの暴力」、今回調査は「配偶者または恋人からの暴力」についてたずねている、などの差があるので厳密な比較は難しいが、いずれにしても女性の被害経験率の方が高い。しかも女性については、全国データの結果よりは低いとはいえ、「1～2回」と「何回も」をあわせた「ある」の合計はほとんどの項目で10%を上回るなど、暴力被害は憂慮すべき状態にあるといえる。

2 セクシュアル・ハラスメントの目撃や相談

問 27 あなたは、セクシュアル・ハラスメント（前問の（7）（8）などのようなできごと）について、自分の職場や学校などで目撃したり相談を受けたりしたことがありますか。

今回の調査では、前問の項目7～8でセクシュアル・ハラスメントの被害経験を聞いたのにあわせ、上記の質問でセクシュアル・ハラスメントを目撃したり相談されたりした経験について聞いた。結果は、下記の図2-63のようになった。

図2-63 セクシュアル・ハラスメントの目撃・相談等の経験率



全体を見ると、噂を聞いたことがある、という回答が最も多く、「1~2回」「何回も」をあわせると約3割にのぼる。それに対し、目撃経験は回答者の1割強、相談された経験は回答者の1割未満、と少ない。

男女差については、カイ二乗検定で有意差が見られたのが「相談を受けて解決に至ったことがある」という項目のみで、男性の「1～2回ある」という回答が女性に比べて多くなっていた。これについては、男性の地位が女性より上であることが多いので、それを利用して解決を導く方法が可能だった、という解釈が可能だろう。あるいは、男性の方がセクシュアル・ハラスメントの解決についての見方が楽観的である、という解釈も成り立つかもしれない。いずれの解釈も、今後さらに検討が必要である。

もう一つ指摘しておかねばならないのは、被害経験と目撃・相談経験の差である。表2-15は、今回の調査で報告された被害経験および目撃・相談経験をまとめたものである。

表2-15 セクシュアル・ハラスメントの被害経験と目撃・相談経験の比率の比較

	全体 (n=1,181)	女性 (n=723)	男性 (n=458)
職場や学校などでの関係を利用して性関係を迫られた	3.9%	5.9%	0.7%
職場や学校などで性的な内容の言葉をかけられたり、性的な内容の会話を聞かされたりして不愉快な思いをした	16.7%	22.4%	7.6%
セクシュアル・ハラスメントの噂を聞いたことがある	31.4%	30.6%	32.7%
セクシュアル・ハラスメントを目撃したことがある	11.3%	10.5%	12.5%
セクシュアル・ハラスメントの相談を受け、解決に至ったことがある	6.3%	4.9%	8.5%
セクシュアル・ハラスメントの相談を受けたが、解決に至らなかったことがある	5.7%	6.1%	5.3%

(注) 比率は「1～2回ある」「何回もある」という回答を合計して算出した。

これを見てもわかるように、噂を聞くということは別にして、目撃や相談の経験は被害経験に比べてまだ少なく、セクシュアル・ハラスメントが人目につかない密室的な状況でおこなわれていることが推察される。

また、すべてで有意差があるほどではないとはいえ、噂を聞く、目撃、相談して解決に至ったことの3項目において、男性の方の経験比率が高く、女性は、被害に遭いやすく情報は入りにくい、という状況に置かれているようである。

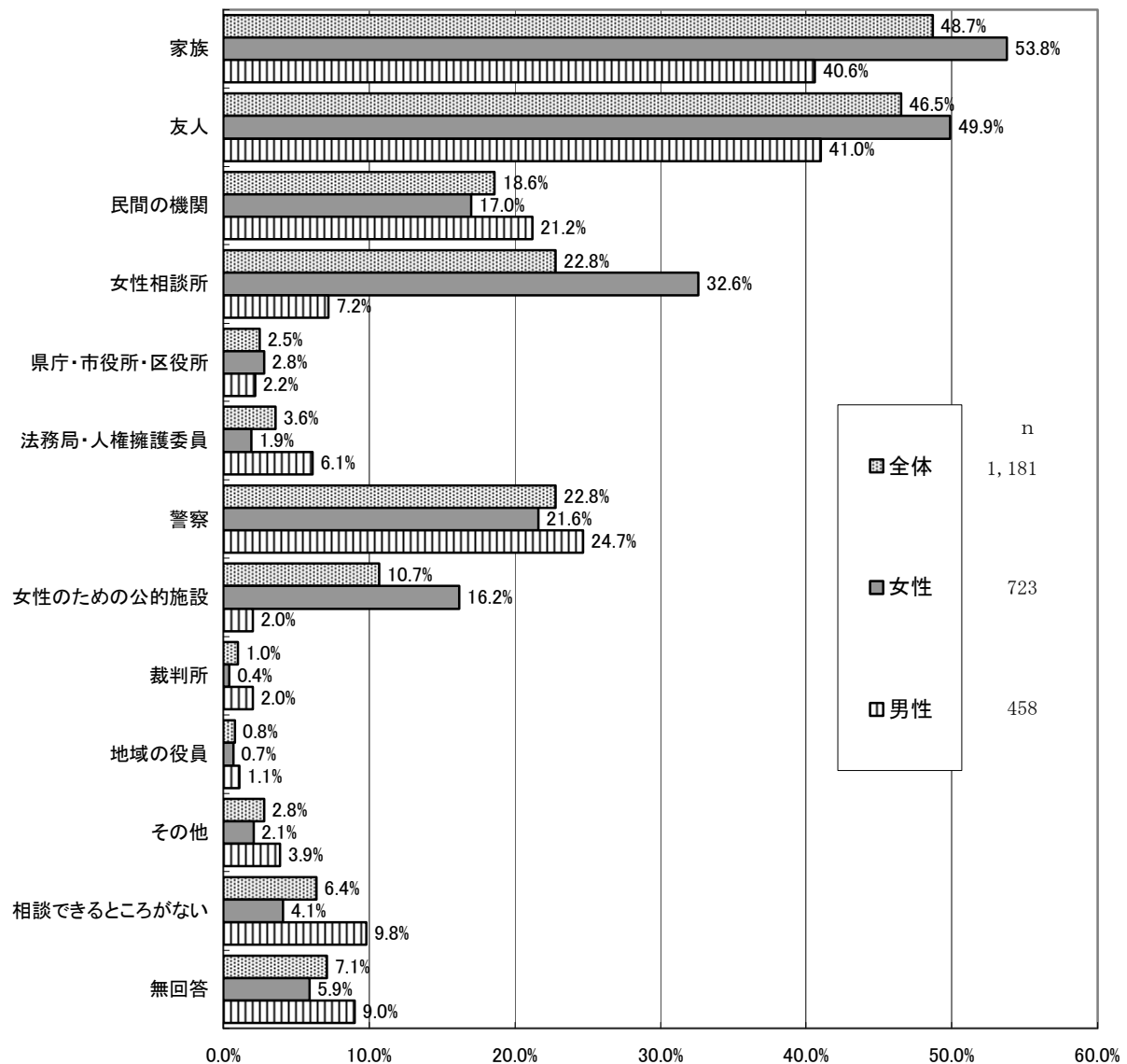
この状況は、女性の人権擁護という観点からは、決して望ましい状況ではない。今後の取り組みが必要である。

3 配偶者・恋人からの暴力の相談先

問 28 あなたは、配偶者（夫や妻）、恋人から暴力の被害を受けた場合、どこに相談しますか。

前回調査と同様、配偶者や恋人から暴力の被害を受けた場合に相談する相談先について、複数回答でたずねた。ただし今回は、前回調査では入っていなかった「家族」「友人」の2選択肢を新たに入れ、前回の選択肢のいくつかをまとめて、選択肢の数が多くなりすぎないように調整した。結果は、下記の図2-64のようになった。

図2-64 配偶者・恋人からの暴力の相談先(複数回答)



ここから明らかになるように、相談先として考えられている第1位は家族、第2位は友人で、この2つの回答率は、女性で50%前後、男性で40%程度、全体では50%弱にのぼり、他の選択肢よりかなり多い。次いで選ばれているのは、女性では相談支援センター、警察、民間機関、女性のための公的施設などだが、男性ではこのうち相談支援センター、女性のための公的施設を選ぶ人はかなり少なく、両者が女性のためのものと認識されていることがうかがわれる。

なお、選択肢の構成が異なるために正確な比較はできないが、前回調査と比べると、警察、民間機関、相談支援センター、女性のための公的施設の4選択肢の回答率が、全体、女性、男性の回答すべてで1～9ポイント程度下がっている。また、無回答比率もかなり下がっている。これは「家族」「友人」という選択肢に回答が流れたためと考えられる。

一方で、「相談できるところがない」という回答は全体および女性では減っているが、男性では増えている。暴力被害に遭う男性が皆無ではないことを前提にすれば、これらの声に耳を傾ける必要があるのかもしれない。

次いで、相談先を性・年代別に分類した下記表2-16をご覧ください。

表2-16 配偶者・恋人からの暴力の相談先(性・年代別)(複数回答)

		20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳以上	n
女	家族	71.4	69.2	47.6	40.6	56.8	40.0	389
	友人	78.6	67.7	53.1	53.1	34.0	18.8	361
	民間の機関(弁護士会、民間シェルター、電話相談など)	10.0	18.0	22.8	23.4	13.6	8.2	123
	女性相談所、女性相談センター、配偶者からの暴力相談支援センター	28.6	38.3	39.3	41.4	23.5	20.0	236
	県庁、市役所、区役所	5.7	3.8	1.4	1.6	1.9	4.7	20
	法務局、人権擁護委員	0.0	1.5	0.7	3.1	3.7	1.2	14
	警察	22.9	21.8	24.8	25.0	18.5	15.3	156
	女性のための公的施設(つながれっとNAGOYA、ウィルあいちなど)	11.4	21.1	22.1	18.8	9.3	11.8	117
	裁判所	1.4	0.0	0.7	0.8	0.0	0.0	3
	地域の役員(区政協力委員、町内会・自治会役員、民生委員など)	0.0	0.0	0.0	0.8	1.2	2.4	5
	その他	2.9	0.8	2.1	3.1	2.5	1.2	15
	相談できるところがない	1.4	2.3	3.4	8.6	4.9	2.4	30
	無回答	1.4	0.8	2.1	0.8	10.5	23.5	43
	N	70	133	145	128	162	85	723
男	家族	50.0	42.3	43.0	33.8	43.8	34.6	186
	友人	59.5	54.9	48.1	43.8	31.4	22.2	188
	民間の機関(弁護士会、民間シェルター、電話相談など)	23.8	14.1	24.1	31.3	18.1	17.3	97
	女性相談所、女性相談センター、配偶者からの暴力相談支援センター	2.4	4.2	10.1	10.0	4.8	9.9	33
	県庁、市役所、区役所	2.4	2.8	1.3	1.3	2.9	2.5	10
	法務局、人権擁護委員	2.4	0.0	5.1	7.5	5.7	13.6	28
	警察	23.8	18.3	22.8	33.8	22.9	25.9	113
	女性のための公的施設(つながれっとNAGOYA、ウィルあいちなど)	4.8	1.4	2.5	2.5	0.0	2.5	9
	裁判所	2.4	4.2	2.5	2.5	0.0	1.2	9
	地域の役員(区政協力委員、町内会・自治会役員、民生委員など)	2.4	0.0	0.0	1.3	1.0	2.5	5
	その他	2.4	4.2	3.8	0.0	3.8	8.6	18
	相談できるところがない	11.9	14.1	12.7	11.3	6.7	4.9	45
	無回答	2.4	0.0	2.5	3.8	16.2	22.2	41
	N	42	71	79	80	105	81	458

注：表内の数字は%。nの欄(ゴシック体)のみ回答者実数。

表2-16からも、いくつかのことがわかる。

まず、家族および友人に相談する、という回答の年代別の傾向である。

友人に相談するという回答は、男女とも年代が上がるほど大きく減少している。ただし相談すると回答したその比率の高さは、男女でかなり異なる。相談するという回答の比率は、女性は20代の約8割から70歳以上の約2割まで、男性も20代の約6割から70歳以上の約2割まで、と幅があるが、おしなべて女性の比率の方が高い。

家族に相談するという回答と年代との関係はもう少し複雑である。すなわち、男女とも、年代が上がるほど回答比率が減少する傾向と、60代で一時増加する傾向が示されている。比率としては、女性のうち4～7割が家族に相談すると回答しているのに対し、男性が家族に相談するという回答は3～5割で、これも男性の方が明らかに低い。

他の選択肢を相談先として選ぶ比率が60代で増えるという傾向は男女とも見られないため、この結果は突出している。ただし、男女とも、60代以上の無回答の比率が、他の年代に比べてかなり増えている。ここから見ると、60代は、DV・暴力被害経験においてあきらめへと変化する時期といえるかもしれない。このことと、家族への相談の意向が一時的に増加することとは何か関連があるかもしれない。ただしこれは現段階では推測であり、詳しいことを知るためには、さらに分析や調査を進めてみる必要がある。

また、シェルターなどの民間機関、女性相談所などの公的機関、警察に相談する、という回答のピークは、男女とも40～50代である。女性はこれに加え、女性のための公的施設への相談の同様の傾向を示している。

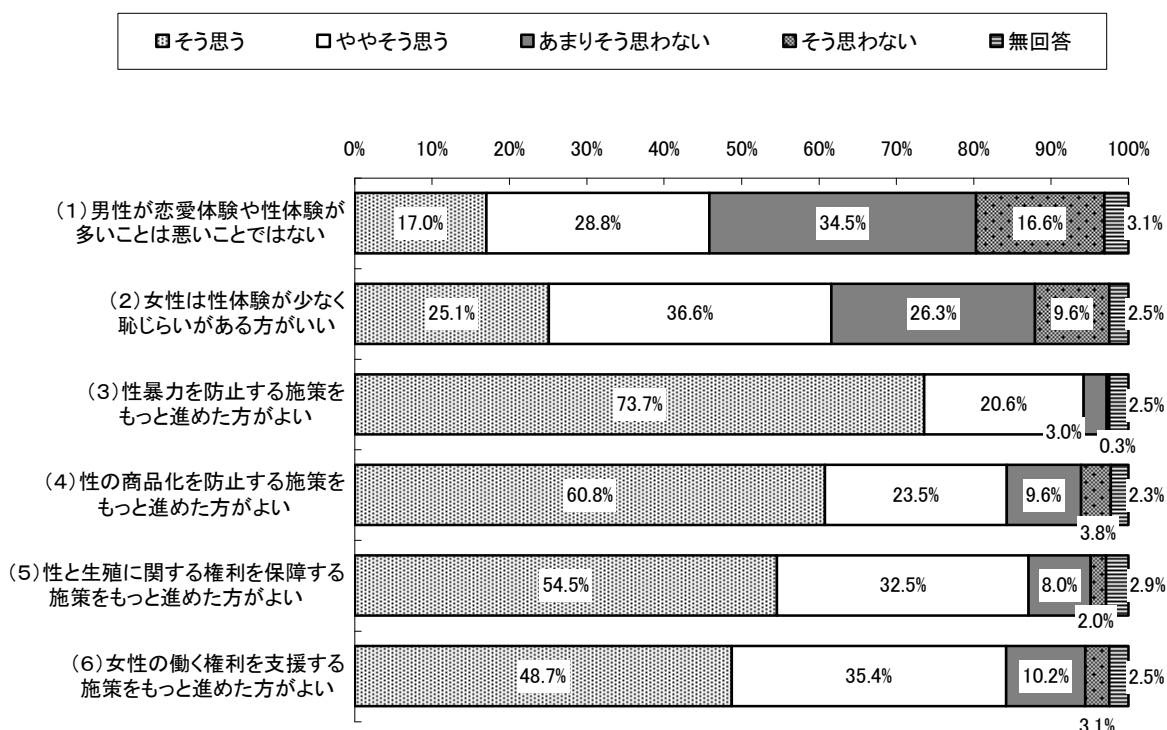
4 性行動と性をめぐる施策に関する意識

問 29 次にあげるような考え方について、あなたのご意見にもっとも近いものはどれでしょうか。

この質問では、性行動についての2項目、性をめぐる施策についての4項目の計6項目について、「そう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の4択で答えてもらった。その結果、全体の回答は図2-65のようになった。

図2-65 性行動と性をめぐる施策に関する意識

n=1, 181



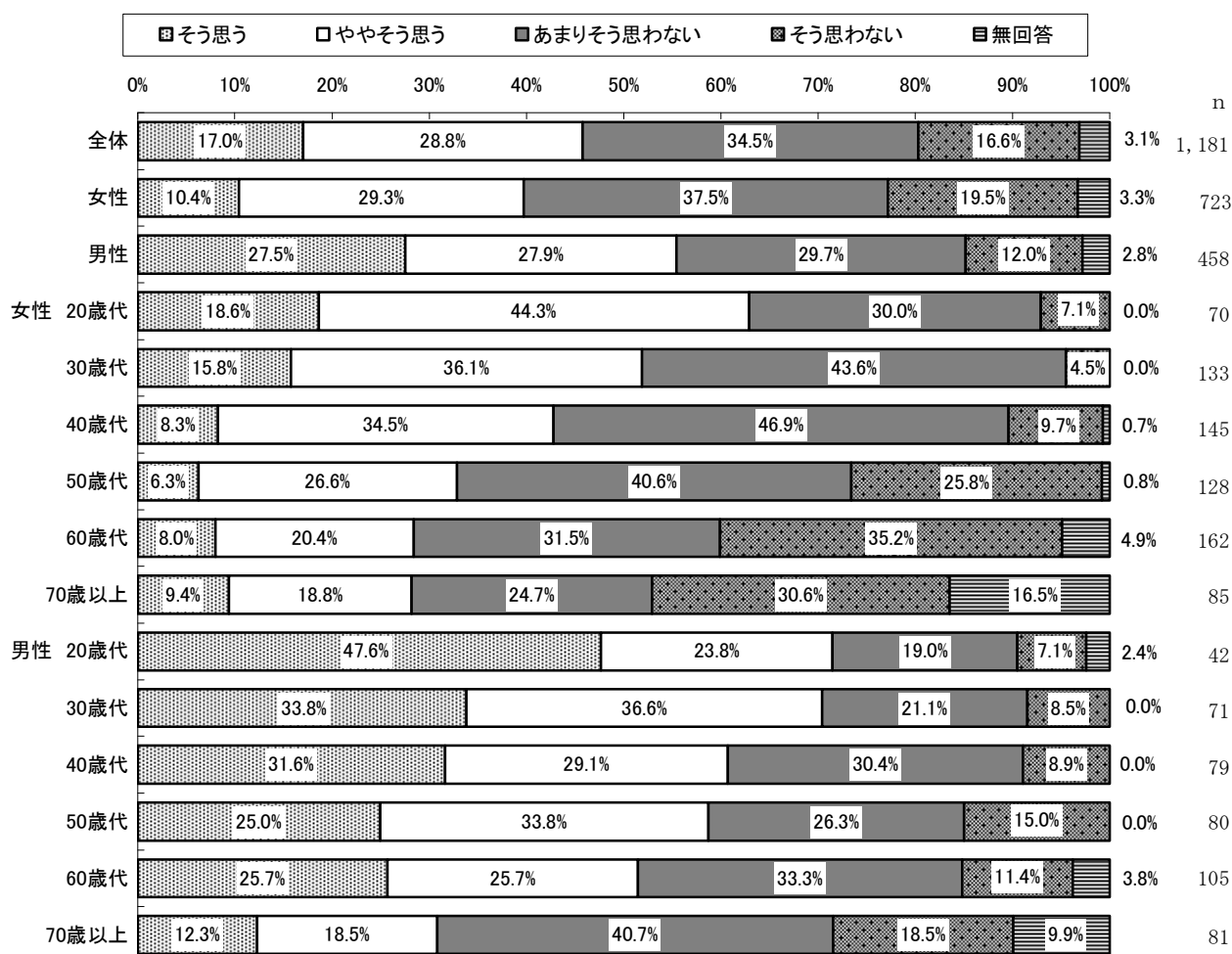
全体の回答を見ると、男性・女性の性行動に対する意見は、肯定的にとらえる見方と否定的にとらえる見方が拮抗するような分布となった。それに対し、性をめぐる施策については、4項目のいずれも「そう思う」と「ややそう思う」の合計が8割を超え、肯定的な見方が多かった。ただし、施策4項目の中でも、性暴力に関する施策については「そう思う」が7割を超えたのに対し、性と生殖に関する権利を保障する施策は5割強、働く権利は5割弱で、その分「ややそう思う」という回答が増え、社会の中の各分野に対する意識の微妙な「温度差」を感じさせる結果となった。

以下、各項目について、少し細かく見ていこう。

(1) 男性が恋愛体験や性体験が多いのは悪いことではない

この項目に対しては、全体の集計以外に、男女別および男女それぞれの年代別の集計をおこない、図2-66のような回答を得た。

図2-66 男性が恋愛体験や性体験が多いことについての意識



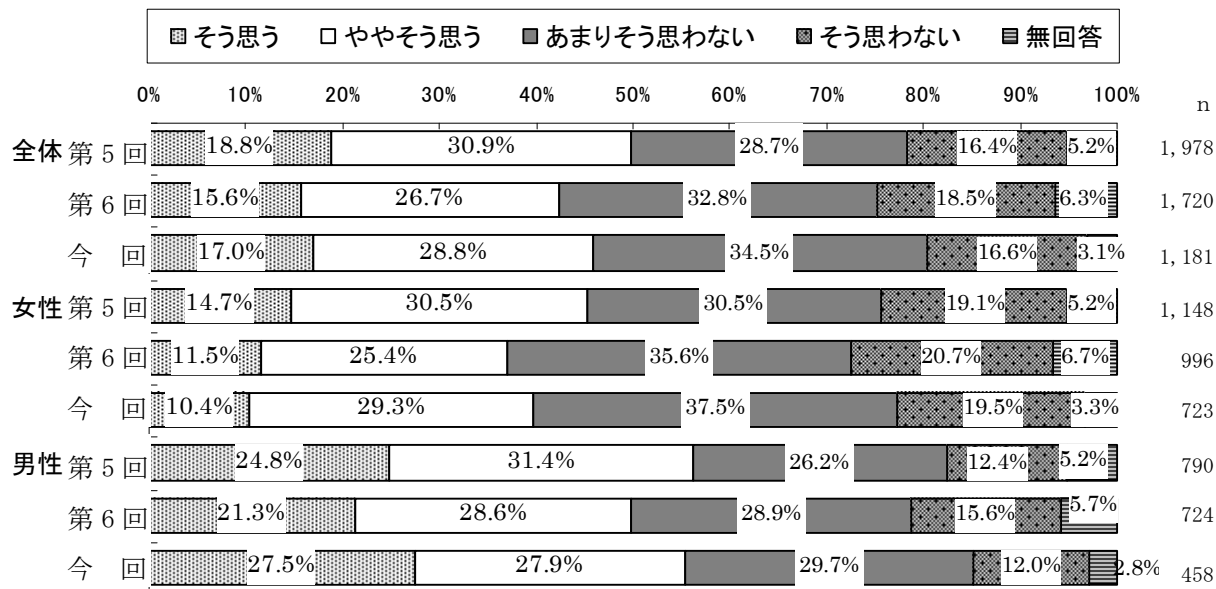
すなわち、全体のうち半分弱が、男性の恋愛・性体験が多い方がいいという考え方に肯定的な回答を寄せている。男女別で見ると、女性よりも男性の方に肯定的な意見が多い。

すなわち、女性よりも男性の方が、男性の体験の多さを評価している。

また、男女それぞれの年代別で見ると、双方とも、年齢が上がるにつれ、体験の多さを評価する回答は減ってくる。すなわち、20代では女性の約60%、男性の約70%が男性の体験の多さに肯定的だが、70才以上では肯定的な回答は女性、男性とも30%程度にとどまっている。ただし、年齢上昇に伴う肯定的回答の減少は、男性よりも女性にはっきり出ており、男性は60代であっても50%程度が「恋愛体験や性体験が多いのは悪いことではない」に肯定的な回答を寄せている。恋愛や性行動に対して肯定的でアクティブな姿勢が、男性の場合は60代くらいまで継続している、と解釈できそうである。

この項目は、毎回の調査において、同じ文言で質問しているため、経年変化を見ることが出来る。その結果は、図2-67に示した通りである。

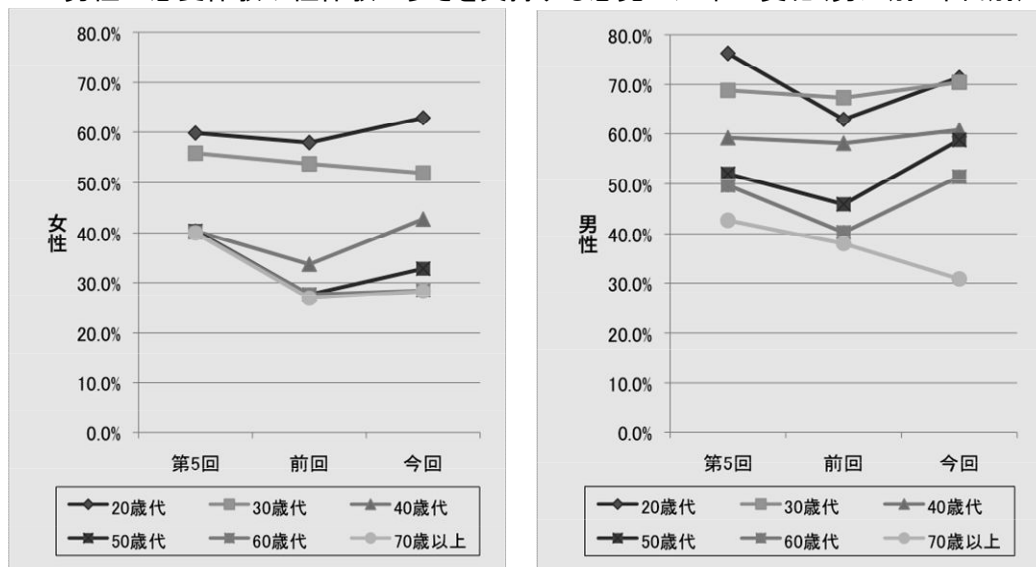
図2-67 男性が恋愛体験や性体験が多いことについての意識の変化(第5回調査～今回調査)



これを見ると、男性の性的な活発さを支持する意見は、第5回（2000年）から前回（2005年）にかけて減少したが、前回から今回にかけてまた増加していることがわかる。男女別に見ても、男性は全体と同様の傾向を示し、女性も「そう思う」人の比率は引き続き減少しているものの、「ややそう思う」人の比率が増加に転じているため、反転傾向はおおむね当てはまるといえそうである。

たとえば今日、「草食系」ということばがメディアを中心に広まるなど、性的にはさほど活発でない男性の存在が認知され、揶揄・批判もあるが、受容的な意見も出てきている。にもかかわらず、このような傾向が示されたことは興味深い。その点についてもう少し検討するため、男性および女性の意識変化を見てみた。結果は図2-68に示した通りである。

図 2-68 男性の恋愛体験や性体験の多さを支持する意見の比率の変化(男女別・年代別)



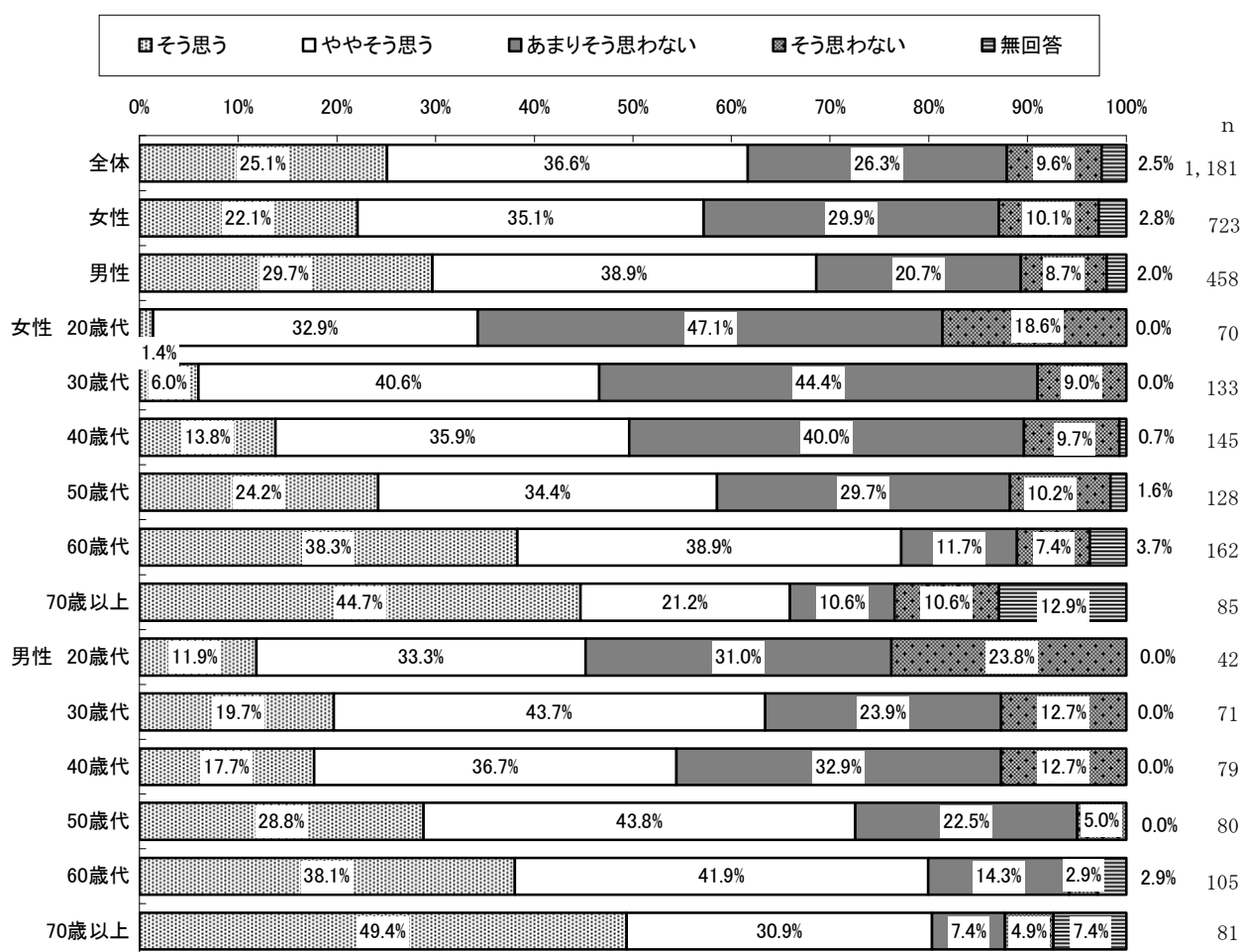
注：グラフには、項目への回答の「そう思う」「ややそう思う」の比率の和を示した

この結果を見ると、男性 30 代と女性 70 代以上を除くすべての年代で、男女とも男性の性的活発さを支持する意見が上昇しているように見える。もちろん、このように細かいグループに分割すると回答者数が少なくなるので、わずかな比率の差であれば誤差の範囲内という可能性も否定できない。だが、そのことを念頭に置いたとしても、「草食系」への支持の増加が続いているとはいえないようである。

(2) 女性は性体験が少なく、恥じらいがある方がいい

この項目に対しても、全体の集計以外に、男女別および男女それぞれの年代別の集計をおこない、図2-69のような回答を得た。

図2-69 女性が性体験が少なく、恥じらいがあることについての意識



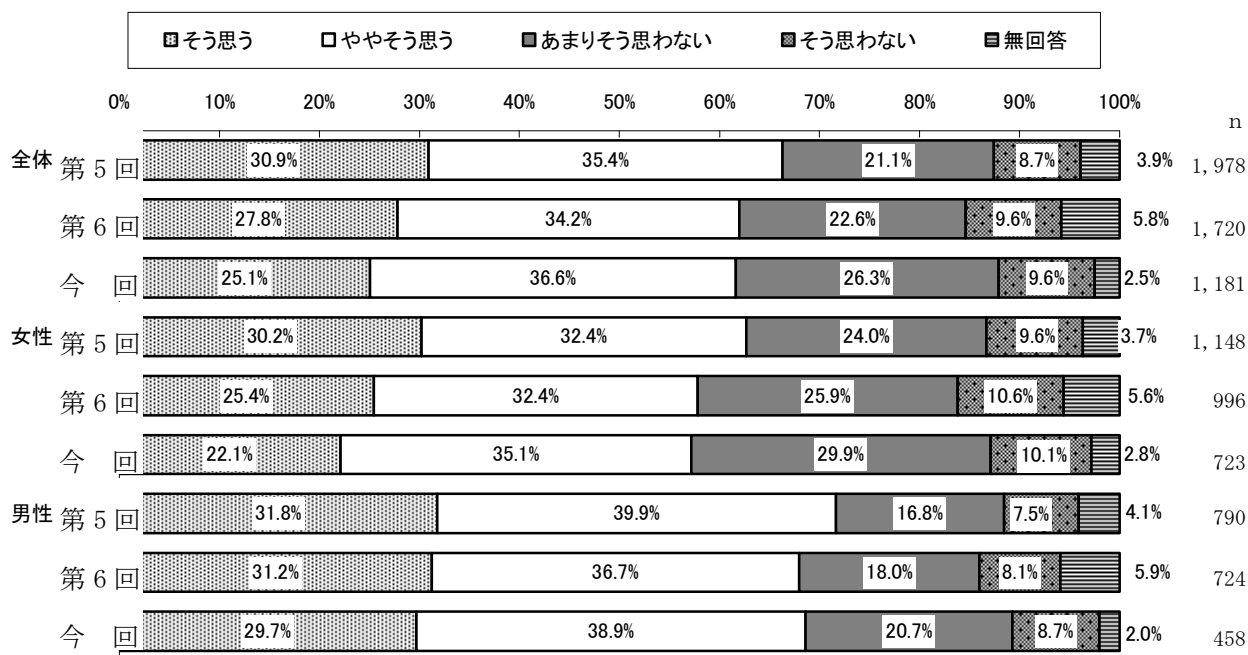
全体のうち6割以上が、女性は性体験が少ない方がいい、という考え方に肯定的な回答を寄せている。男女別で見ると、女性よりも男性の方に肯定的な意見が多い。すなわち、女性よりも男性の方が、女性の体験の少なさを評価している。男性の性的な活発さ、女性の性的に受け身な態度を評価するのは、ともに男性が多い、といえる。

男女それぞれの年代別で見ると、男女双方とも年代が上がるにつれ、体験の少なさを評価する回答は増えてくる。女性の性体験の少なさを評価するのは20代女性で約40%、60代女性で約75%、20代男性で約45%、60代男性で約80%である。すなわち、女性の性的に受け身な態度を評価するのは高年齢層に多い、といえる。

ただし男性の40代は、男性30代・50代より女性の体験の少なさを評価する回答が少ない。この原因は不詳であるが、興味深い傾向と見ることができるだろう。

この項目も、毎回の調査において、同じ文言で質問しているため、経年変化を見ることができる。その結果は、図2-70に示した通りである。

図2-70 女性が性体験が少なく恥じらいがあることについての意識の変化(第5回～今回)



これを見ると、先ほどの男性の性的な活発さに関する意見の傾向とは異なり、女性の性的な慎重さを支持する意見は、おおむね減少傾向が続いているといえそうである。ただし、男性の「そう思う」と「ややそう思う」を加えた比率が、今回は前回は0.5ポイント上回り、女性の「そう思う」と「そう思わない」の比率の減少幅も狭まっているなど、減少傾向はやや鈍っていると見ることができる。

また、以上2問の回答を組み合わせると、男女の性行動に関する意識のパターンを見ることができる。4択の回答を、「そう思う」「ややそう思う」という賛成の側と、「あまりそう思わない」「そう思わない」の反対の側の2択にまとめてから、2つの質問の回答を組み合わせると、4通りの回答のタイプが得られる。それは、第1に「男は活発、女は貞淑に」という性行動パターンを支持するタイプ、第2に「男も女も活発に」という性行動パターンを支持するタイプ、第3に「男も女も貞淑に」という性行動パターンを支持するタイプ、第4に「男は慎重、女は活発に」という性行動パターンを支持するタイプの4つといえるだろう。なお、第1のタイプと第4のタイプの意見は、男女がしたがうべき性行動の基準が異なる。特に第1のタイプは、女性に貞淑を求め男性の性的積極性は許容する、男性優位的な性の二重基準（以下「ダブルスタンダード」と表記）であるという根強い批判がある。

この4タイプの分布を、全体、男女別、男女それぞれの年代別に示したのが、表2-17である。また、同じ文言で調査をし、同様の計算をおこなっている前回調査（2005年）の結果を示したのが、表2-18である（第6回調査報告書より再掲）。

表2-17 性行動に関する意識の4タイプ(今回)

		男は活発、 女は貞淑に	男も女も 活発に	男も女も 貞淑に	男は慎み、 女は活発に	n
全 体		26.4%	21.0%	36.6%	16.0%	1141
女性	全体	19.4%	21.8%	39.2%	19.5%	696
男性	全体	37.3%	19.8%	32.6%	10.3%	445
女性	20 歳代	12.9%	50.0%	21.4%	15.7%	70
	30 歳代	18.8%	33.1%	27.8%	20.3%	133
	40 歳代	18.8%	24.3%	31.3%	25.7%	144
	50 歳代	17.5%	15.9%	42.1%	24.6%	126
	60 歳代	21.6%	8.5%	58.8%	11.1%	153
	70 歳以上	27.1%	7.1%	47.1%	18.6%	70
男性	20 歳代	29.3%	43.9%	17.1%	9.8%	41
	30 歳代	39.4%	31.0%	23.9%	5.6%	71
	40 歳代	32.9%	27.8%	21.5%	17.7%	79
	50 歳代	38.8%	20.0%	33.8%	7.5%	80
	60 歳代	44.6%	8.9%	37.6%	8.9%	101
	70 歳以上	32.9%	1.4%	53.4%	12.3%	73

表2-18 性行動に関する意識の4タイプ(前回)

		男は活発、 女は貞淑に	男も女も 活発に	男も女も 貞淑に	男は慎み、 女は活発に
全 体		26.2%	19.0%	39.7%	15.1%
女性	20 歳代	8.3%	52.8%	21.3%	17.6%
	30 歳代	15.1%	39.5%	25.9%	19.5%
	40 歳代	13.1%	21.4%	41.7%	23.8%
	50 歳代	18.5%	10.3%	51.6%	19.6%
	60 歳代	26.7%	4.2%	54.5%	14.5%
	70 歳以上	30.5%	2.5%	59.3%	7.6%
男性	20 歳代	33.9%	32.2%	23.7%	10.2%
	30 歳代	37.1%	31.9%	19.0%	12.1%
	40 歳代	43.6%	16.8%	25.7%	13.9%
	50 歳代	33.1%	15.0%	40.2%	11.8%
	60 歳代	35.0%	7.4%	47.9%	9.8%
	70 歳以上	37.2%	6.2%	45.1%	11.5%

今回の結果を見ると、全体では、最も多いのが「男も女も貞淑に」という意見で、次いで「男は活発、女は貞淑に」、その次が「男も女も活発に」であった。だが、結果を細かく見てみると、男女差も年代差も大きく、全体の傾向がどこでも当てはまるわけではないことがわかる。

まず男女別の傾向を見てみよう。男性全体では「男は活発、女は貞淑に」が最も多く、次いで「男も女も貞淑に」が多かった。それに対し女性は「男も女も貞淑に」が最も多く、あとの3つはほぼ同じような比率で、男性の「ダブルスタンダード」支持が目立つ結果となった。

次いで年代差であるが、「男も女も活発に」と「男も女も貞淑に」の比率が年代によって大きくちがうのが目立つ。前者は20代など若年層の回答が多く、後者は60代以上の回答が多く、しかもこれは男女とも共通した傾向といえる。

「男は活発、女は貞淑に」について見ると、このタイプでは、高年齢層ほど支持が多いという年代差も見られるが、男性のうち最も支持の少ない年代（20代、29.3%）でも女性で最も支持の多い年代（70歳以上、27.1%）より支持が多く、年代差よりも男女差が目立っている。

一方、「男は慎み、女は活発に」という意見への支持は全体の中では低く、年代分布を見ると、40～50代の中年期をピークに若年・高年齢で低い、という結果になっている。またこの意見への支持の性差を見ると、男性より女性の方が全年代で高く、男性は40代の支持が他の年代に比べて突出して高い以外は、おしなべて低い水準にとどまっている。

以上を総合すると、次のようにまとめられる。まず若年層では、男女とも「男も女も活発に」という意見への支持が最も多いが、その支持は年代が高くなると減少し、代わりに「男も女も貞淑に」「男は活発、女は貞淑に」という意見への支持が高まってくる。だが、この2つのうち後者の「ダブルスタンダード」は、支持の男女差が大きい。また、「男は慎み、女は活発に」という意見への支持は全体では最も少ないが、男性よりは女性に多く、中年期に支持のピークがくる独特の分布を描いている。

前回調査結果の分析については第6回調査報告書に譲るが、前回と今回を比較して見える変化については以下にまとめておきたい。

全体および男女別各年代のタイプ別回答率の差を見ると（表省略）、全体では「男も女も活発に」が2ポイント増え、「男も女も貞淑に」が3ポイント減った。

男女別各年代での変化を見ると、興味深い変化がいくつか見られる。まず、「男は活発、女は貞淑に」という「ダブルスタンダード」への支持が、女性では、20～40代で増加し、50～70代で減少している。その変化に対応する他のタイプの意見への支持の変化で目立つのは、20～30代女性では「男も女も活発に」への支持の減少、40～50代および70歳以上女性では「男も女も貞淑に」への支持のかなり（9～12ポイント）の減少である。すなわちここからは、この5年間で、若年女性はやや「保守化」し、中年女性はリベラルになったと見ることができる。

それに対し男性は、さらに複雑な動きを見せている。20代および40代男性は「男は活発、女は貞淑に」と「男も女も貞淑に」の支持が低下し、「男も女も活発に」への支持が上昇した。それに対し50～60代男性では「男は活発、女は貞淑に」「男も女も活発に」への支持が上昇し、「男も女も貞淑に」への支持が低下した。また、70歳以上の男性では逆に「男は活発、女は貞淑に」「男も女も活発に」への支持が低下し、「男も女も貞淑に」への支持が上昇した。そして、30代男性は意見の変化が比較的少なかった。つまり、20代および40代男性はよりリベラルになり、50～60代男性では意見が割れ、20代の男女差がやや縮まったといえる。

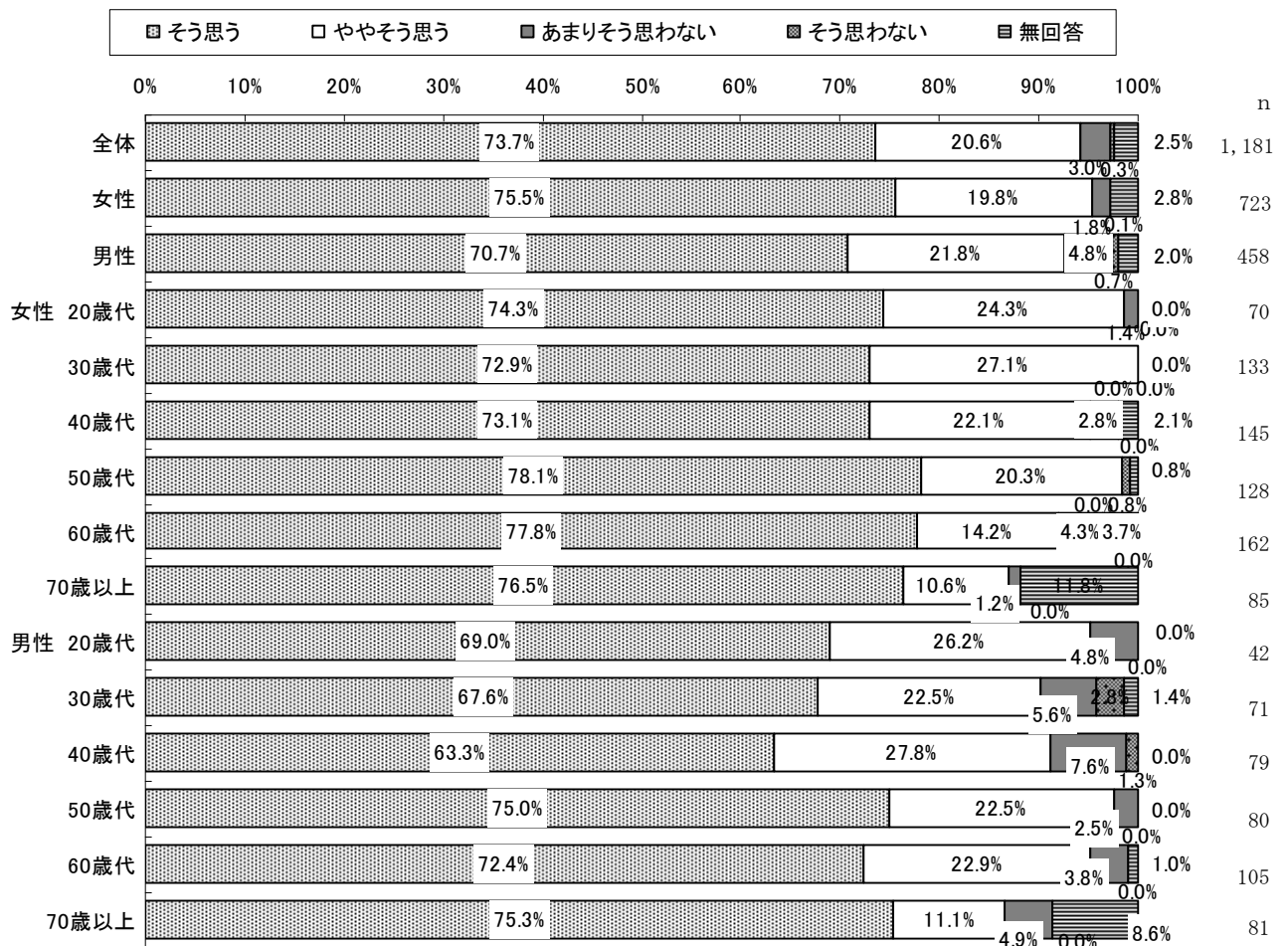
もちろん、今回の回答比率を見直してみると、保守的になったという若年女性でまだまだ「男も女も活発に」という意見が多く、リベラルになったという中年女性では「男も女も貞淑に」が最も強いが、それでも時代の変化にともない、少しずつ社会意識は変化しているといえそうである。

(3) 性暴力（セクシュアル・ハラスメント、強姦、痴漢など）を防止する施策をもっと進めた方がよい

女性に関する施策について、全体を通じての回答の傾向は本節の冒頭で見たが、ここからは各項目についての回答の男女差について見ていきたい。

まず、性暴力についての施策であるが、男女別の回答は、図2-71のようになった。この項目については全体として肯定的な回答が多かったか、男女差についてのカイ二乗検定では5%水準の有意差があり、やはり女性の方がより肯定的な意見をもっているということが明らかになった。ただし、年代別に比較をしてみると、有意差が見られたのは30代のみで、他の年代では差が明瞭ではなかった。

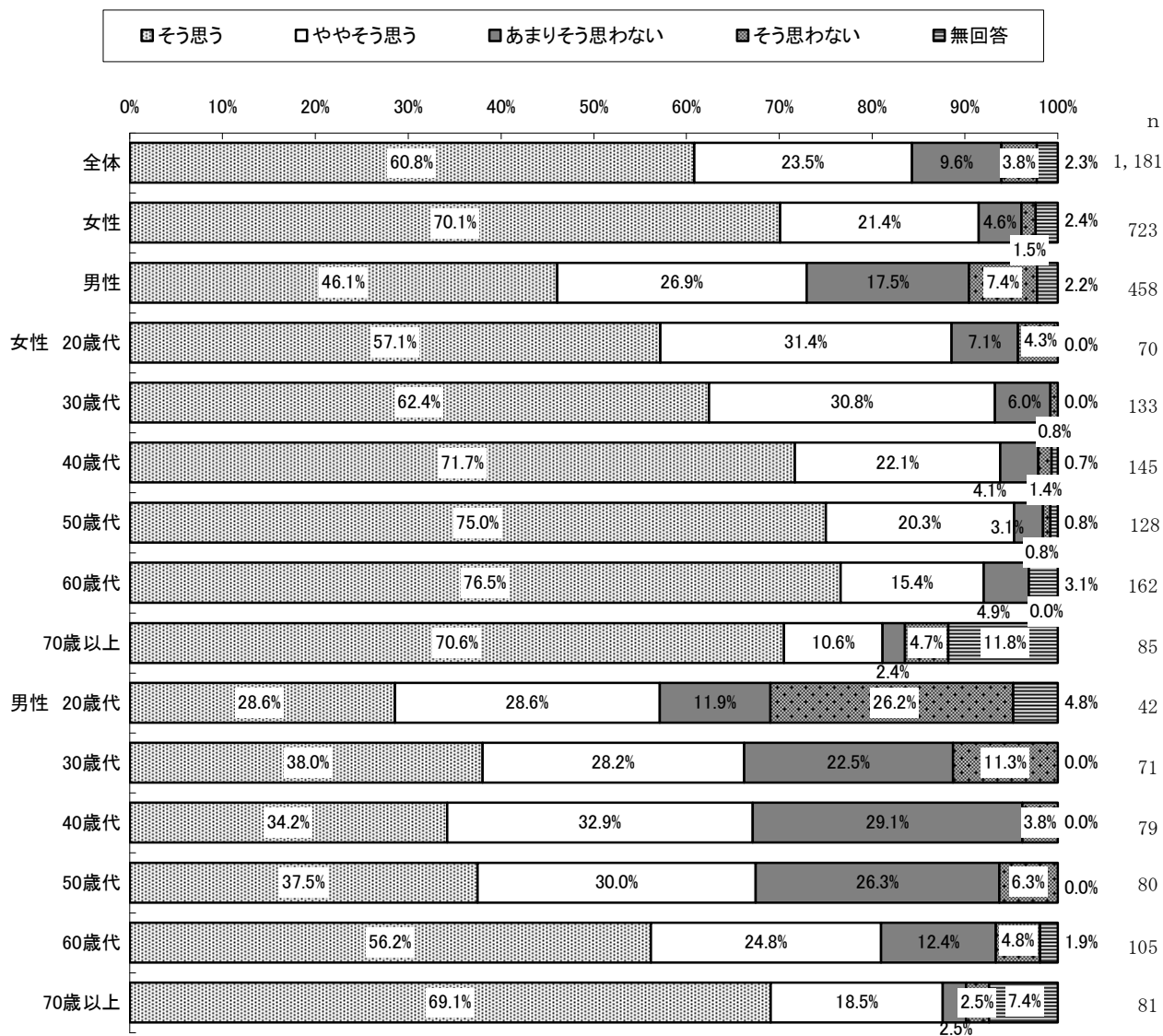
図2-71 性暴力防止施策についての意識



(4) 性の商品化（売春、ポルノグラフィなど）を防止する施策をもっと進めた方がよい

性の商品化に対する施策に関する意見は、男女差が非常に際だつ結果となった。図2-72を
ご覧いただきたい。

図2-72 性の商品化防止施策についての意識

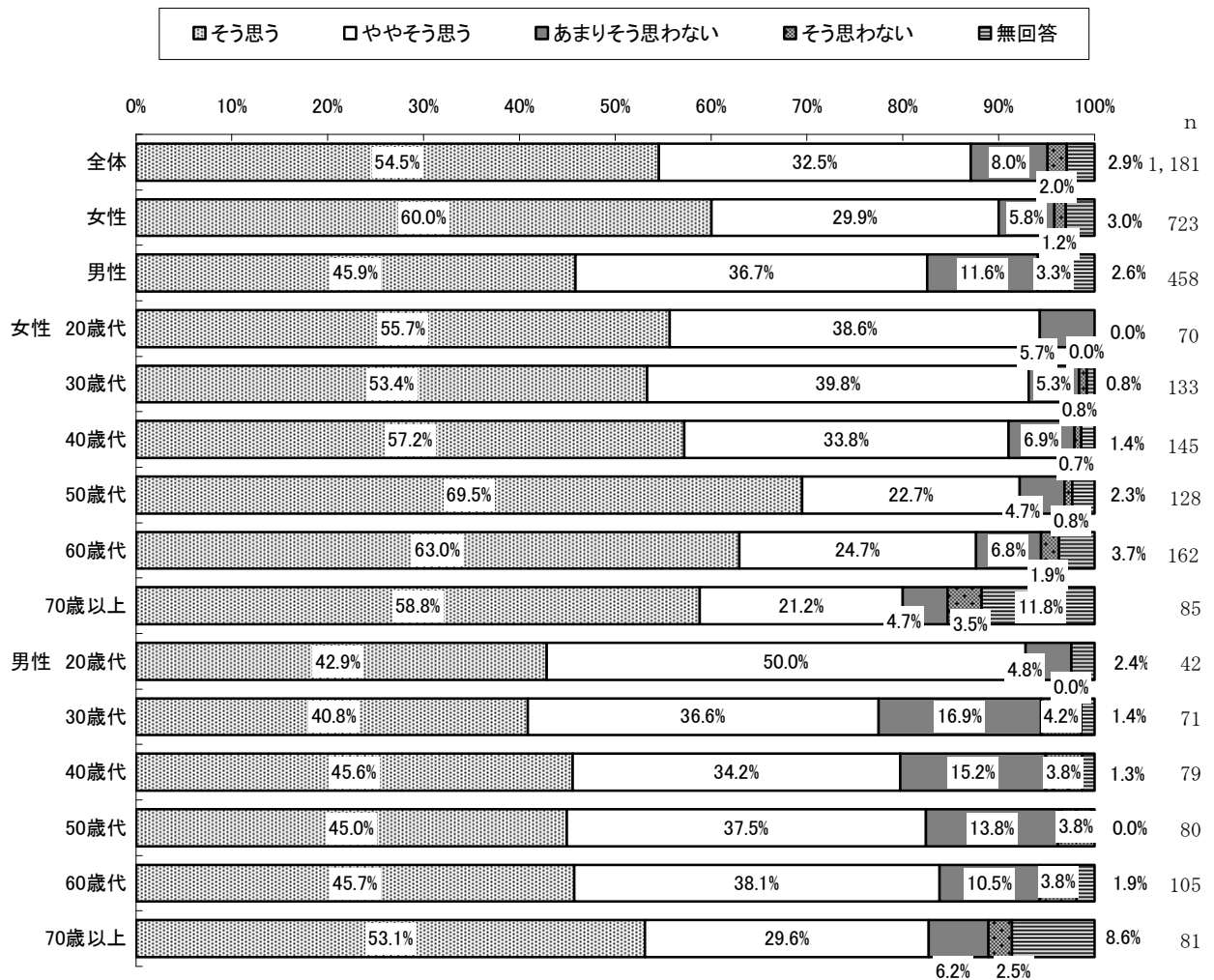


女性全体と男性全体を比較した場合、女性の約90%が性の商品化を防ぐ施策に肯定的な
のに対し、男性では約70%に過ぎない。また、年代別の回答を比較すると、70代以上を除
き、年代が上になるにつれて肯定的な意見が増える傾向は男女同じであるが、男性20～50
代の肯定的意見は50～60%前後にとどまり、女性の同年代の80～90%程度とはかなりの差
がある。各年代についてのカイ二乗検定の結果も、70代以上を除き、1%水準で有意差が
見られた。

(5) 性と生殖に関する権利（避妊、性感染症防止など）を保障する施策をもっと進めた方がよい

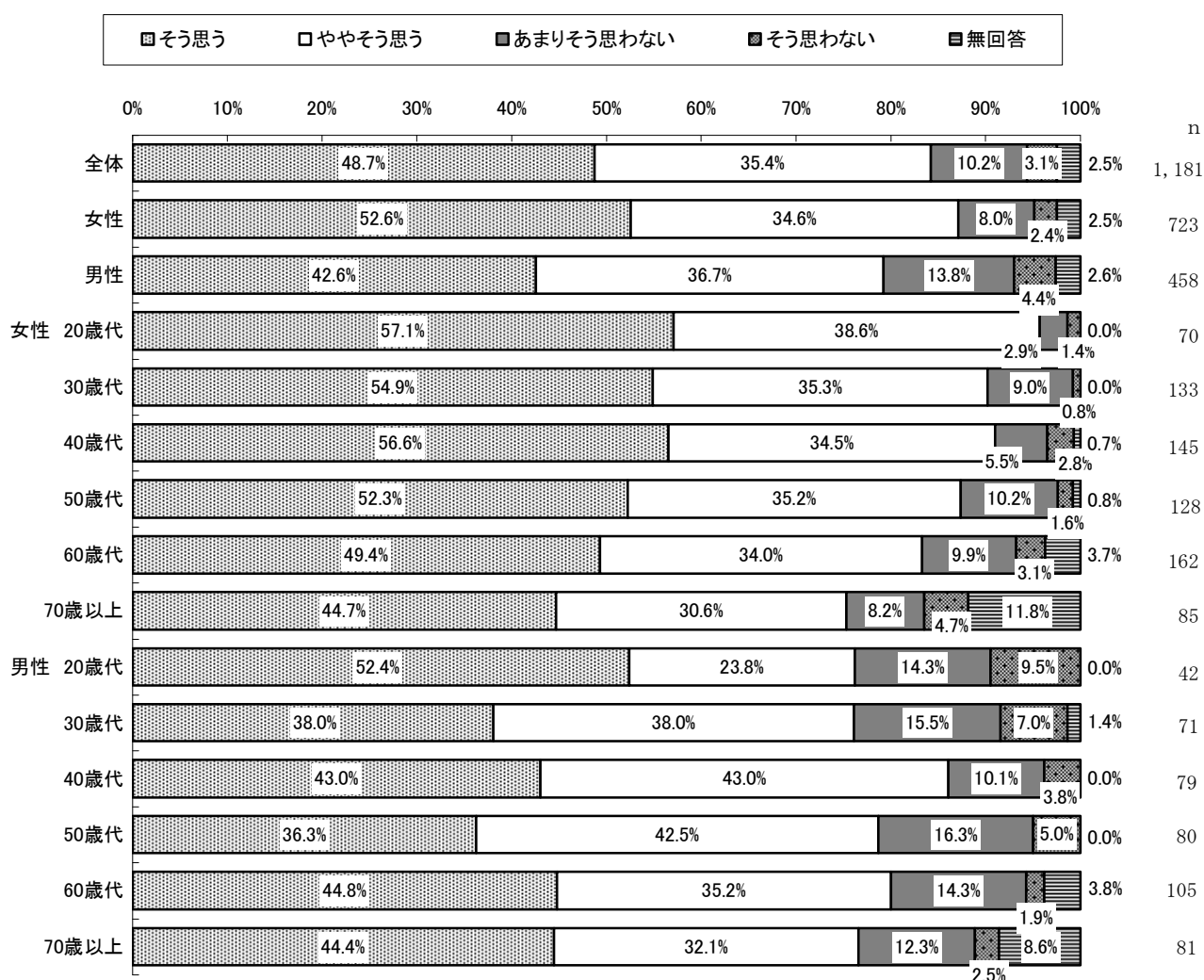
性と生殖に関する権利についての意見については、図2-73のような結果が得られた。全体的に肯定的な意見が多いが、女性の方が男性よりも肯定的な意見が多く、カイ二乗検定でも、全年代、30代、50代、60代で有意差が見られた。また、回答者数は少ないが、20代男性で肯定的な意見が多かったことが目を引く。

図2-73 性と生殖に関する権利保障施策についての意識



(6) 女性の働く権利（就労・昇進の平等など）を支援する施策をもっと進めた方がよい
 女性の働く権利に関する施策への意見については、図2-74のような結果が得られた。

図2-74 女性の働く権利支援施策についての意識



全体のうち肯定的な意見が8割以上で、肯定的な意見が多かった。また、その中でもやはり女性の方が男性よりも肯定的な意見が多く、カイ二乗検定で1%水準の有意差が出た。

だが、年代別に見ていくと、20代、30代では男女間に有意差があるが、40代以上では有意差までは見られなかった。分布を細かく見ていくと、20代、30代では、肯定的な意見が男性でやや少なく女性が多いために差がつき、40代では男性の肯定的な意見が増えたため、50代以上では女性の肯定的な意見がやや減ったために差が見えにくくなった、と考えられる。